

ほんとうの優しさとは

豊崎中学校 3年 村吉 梨花

何不自由なく、学校に通い挑戦したいことに取り組む私は、本当に幸せな毎日を送っています。でも明日何かあった場合、私が障がいと向き合うことになった時、私はどんな毎日を送るんだろうと、ふとよぎりました。それは、パラリンピックのバドミントンを見ていた時のことです。車椅子バドミントンの梶原大暉選手は中学二年生の時、突然の事故で車椅子生活になりました。と、アナウンサーが紹介しました。そうなんだ、私もずっとこんな毎日が当たり前ではなく、突然明日から人生が変わるかもしれないんだと思いました。そんな時、中学一年生の職場体験を思い出しました。

私は、職場体験で障がい者施設に行きました。その障がい者施設では、普通の小学校に通えない、特別支援学校に通う同年代の子どもが集まる施設でした。私は普段、障がいをもつ人と接する機会がなかったのですが、どう接するのが正解なのかわかりませんでした。また、無意識のうちに誤った偏見や勝手なイメージから、障がい者を「怖い」と感じていたこともあり、あまり気が乗らない中での職場体験でした。

職場体験初日、大きい声を出したり走り回っている男の子がいました。公園で見かける小学生と変わらないはずなのに、「障がい者」というだけで、なぜか更に「怖い」と思いました。緊張と不安が入り混じり、笑うことも話しかけて会話をすることさえできませんでした。そんな私の様子を見た職員の方に、「ここに來ている子ども達は、

見えない、話せない障がいを持っている。だからこそ、その場の雰囲気や敏感に感じてしまう。私たちが『楽しい』と思って接しないと、不安が相手にも伝わってしまう」と、言われました。それを聞いても、私にはどう行動し、接したら良いのかわかりませんでした。あまりピンとこなくて「障がい者だから繊細。とにかく、他の人よりももっと優しくしなければいけない。」と、勝手に思い込んでいました。

2日目には、職員の方と利用者の児童と公園に行きました。その児童は、自分の力で立つことができず、車椅子を利用していました。私も初めて見た時は驚きました。正直、私は公園に着いた時、とても周りの目を気にしていました。公園にはたくさんさんの保育園児がいて、不思議そうな目でじつと見られていたのを覚えています。写真を撮る時には、私たちの周りにたくさんの方が集まり、私は「今すぐにでもここから離れたたい。恥ずかしい。」と思いました。今、思い返してみると、私が感じていたことは差別になっていたと思います。その日のおやつ時間では、一人でおやつを食べている女の子に声をかけて一緒に食べました。そのとき、全身で喜びを表現し、ニコニコしてとても嬉しそうな笑顔は、私も勇気をもりました。その子が、「ひとりで食べるよりも、誰かと一緒に食べる方がおいしい」と、感じてくれたことが私は何よりも優しい気持ちになりました。

最終日、私が小学校低学年程の女の子と遊んでいるときに、急に何か話しかけてきました。私は全く理解ができず、ただその場で見ていただけでした。そこに職員の方が来て、目を見てひとつひとつ、ジェスチ

ヤーを加えながら話をしていました。それを見て、私は漸く自分の考えが間違っている事に気がつきました。私は、「障がい」を理由に、障がい者を私とは違う「特別な存在」として扱っていました。職員の方々は、ひとりひとり個人として理解し、尊重していました。他にも何をするに對しても、相手を焦らせたりすることなく、むしろ相手のペースに合わせていました。相手が伝えやすく、表現しやすくできるような、受け入れやすい態度で常に笑顔で接していました。

私が障がい者に対して行っていた「優しさ」は、他の人に対しての思いやり・共感ではなく、「表面上の優しさ」でした。自分よりも弱い立場にあると思ってしまう、無意識のうちに、区別し、偏った接し方になっただけだと思います。これが「差別」になっってしまうとわかりました。

私は、職場体験でこの障がい者施設を訪れることができて心から良かったと思います。外で障がい者を見かけたときや、学校への支援学級に通う生徒にも、今までなら「可哀想」としか思えませんでした。「何か困っていることは無いかな、声をかけてみようかな。」と思えるようになりました。誰でも、「差別はしてはいけないもの」と知っているとは思いますが、私のように無意識のうちに思っていることが「差別」になっっていないか知ってほしいと思いました。この職場体験をきっかけに、今まで競技名すら知らなかったパラリンピックにも興味をもつことができました。様々なハンディを持った選手たちがひたすら努力し、困難を乗り越え競技に挑む姿は、誰よりもかっこよく輝いて見えました。

私は、テレビやニュースなどの限られた情報に惑わされず、自分の経験から気づくことができた考えを軸に行動していきたいと思えます。そして、自分とは違うからといって、その人のすべてを否定したり、区別したりする人がいなくなっただけです。ほんとうの優しさとは、表面上の行動ではなく、相手への信頼と理解によるものだと知ることができました。お互いを尊重し合い、支え合う関係を築くことで、今よりも、みんなが安心して優しく夢を叶える社会になると思えます。明日、私の隣りに目の不自由な方がいれば笑顔で咲く、向日葵の様子を伝えます。耳の不自由な方がいれば、一緒に潮風を感じたいです。

時には、同じ目線でじっくり歩き、未来に向かってゆっくりと進む世の中を目指すことがほんとうの優しさだと思います。私はそんな未来をつくっていききたいです。